様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ０３０９７

研究課題名（和文）エスニシティとジェンダーの交差性からみる在留外国人の精神的健康

研究課題名（英文）Intersectionality of ethnicity, gender and mental health

研究代表者
鈴木　華子（Suzuki, Hanako）

立命館大学・総合心理学部・准教授

研究者番号：００６３４６２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は日本国外にルーツを持つ人たちを対象として、日常生活における他者からの扱いとウェルビーイングについて検討した。質問紙調査の結果、一部の人たちは週1回以上の頻度で他者と比べて丁寧さに欠けた扱いを受けたりしており、不当な扱いを受けていると感じる頻度が高いほど、ウェルビーイングが低くなる傾向が見られた。インタビュー調査の結果、自己や現状が相対性の中に存在すること、支援資源が関係性の中に存在することが明らかとなった。さらに、ジェンダーや性的指向、婚姻状況といった個人の背景によっても、必要となる支援資源が異なることがうかがえ、多様な背景を考慮した支援と社会基盤を構築してくことの重要性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究から、日本で暮らしている「外国人」として一括りにされることが多い国外にルーツを持つ人たちの経験は一様ではなく、それぞれの背景や生活状況によって日常で経験する他者からの扱いや他者との関係は異なり、また、必要なる支援資源も異なることが明らかとなった。日本国外にルーツを持つ人たちへの支援は重要であると同時に、一つの側面（例えば、外国人であること）だけに焦点を合わせた支援では足りないことを明らかにしたことは、アイデンティティの交差性の重要性を示す上で学術的意義が大きい。また、今後の支援の提供に示唆を与える成果は、多様性を包摂する社会基盤の構築に寄与する点で社会的意義が大きい。

研究成果の概要（英文）：This study examined the everyday discrimination experiences and well-being among people who have roots outside of Japan. The results showed that some people felt that they were treated less politely than others more often than once a week, and the more often they felt they were treated unfairly, the lower their well-being tended to be. The interview revealed that the self and the current situation exist in relativity, and that they found useful resources in relation with others. Moreover, it was indicated that people with different backgrounds, such as gender, sexual orientation, and marital status, sought and needed different supports and resources for their daily life. The study suggests that it is crucial to provide various types of resources to support people with diverse backgrounds and build a social system inclusive of diverse backgrounds.

研究分野：カウンセリング心理学

キーワード：多文化カウンセリング　ウェルビーイング　日本国外にルーツを持つ人　アイデンティティ　交差性　支援資源　多様性と包摂

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

2019 年 6 月時点において、永住者・留学・技能実習等の中長期在留資格で日本に暮らす外国人は 280 万人を超え、過去最高となった（法務省，2019）。国際社会貢献や少子高齢化対策に資する政策や世界的なグローバル化の影響により日本で暮らす外国人は増加し続けている。外国人としての生活には困難が伴うと言われ、第 2 言語での生活やソーシャルサポートからの離別によるストレス、文化変容やアイデンティティ変容を経験することが報告されている（e.g. Poyrazli, 2003; Smith & Khawaja, 2011; Suzuki at el., 2017）。

人種、民族、ジェンダー、性的指向、宗教、障害、社会的階級、年齢等の社会的属性を見ると、その中で、社会で周縁化される人たちがいる。例えば、日本において国外にルーツを持つ人がそうであり、人権教育啓発推進センター（2017）の調査によると、40%の外国人が「外国人であること」を理由に入居を断られた経験があるという。このようなマイノリティの周縁化は見えにくく気づかれにくいが、日々のマイノリティとしての生活はアイデンティティ形成や精神的健康に影響する。先行研究によると、マイノリティのアイデンティティは社会的抑圧と関連し（Branscombe, Schmitt, & Harvey, 1999）、被差別経験は抑うつや不安等の精神的症状に関連すると言われている（Chou et al., 2012; Kessler et al, 1999）。

近年、日本でもセクシャルマイノリティをはじめとしてマイノリティを対象とした研究が増加してきた。しかしながら、それらの研究は、「外国人」「在日コリアン」といった社会的属性や社会的アイデンティティの一面のみに焦点が当てられる傾向がある（e.g. 白石・三木, 2010; 李, 2012）。各社会的属性の構成員は一面では均質に見えても実際は多様であり、個人のアイデンティティも、その人が置かれている社会の構造や環境、立場によって揺れ動く。そうした複雑で複合的な社会カテゴリーやアイデンティティを検討する時に用いられる概念として交差性（intersectionality）があり（Crenshaw, 1989）、相互排他的な社会的カテゴリーの複雑な相互作用を可視化させる。近年では、人種、民族、ジェンダー、性的指向、社会的階級等による社会的アイデンティティの複雑な重複を理解するための理論的枠組みとして海外の心理学研究で広く使われ始めている（e.g. Banks & Kohn-Wood, 2002; Kelly et al., 2018）。

２．研究の目的

本研究は、「外国人」としてひとつの社会的カテゴリーで括られがちな在留外国人の精神的健康を交差性の理論的枠組みを用いて検討することで、複合的な要因が絡み合う外国人のエスニシティおよびジェンダーのアイデンティティ発達と変容、差別・社会的排除といった社会との関係性、そしてメンタルヘルスの関連を紐解くことを目的とする。日本国外にルーツを持つ人たちが増加し続けているにも関わらず、在留外国人が経験する不当な扱いや精神的健康（well-being）を検討している研究は少なく、知見を蓄積していくことが必須である。量的調査から心と社会の現状を広く把握し、質的調査からアイデンティティ発達や社会との関係性、メンタルヘルスを交差性の視点から複合的に解明する。それにより、日本で暮らす国外にルーツを持つ人たちが経験する不当な扱いと心身的健康の関係を明らかにし、多様な背景を持つ人たちが暮らしやすい社会システムの基盤構築に繋げる。

３．研究の方法

日本に 1 年以上居住する日本国外にルーツを持つ人を対象として研究協力者を募集した。研究協力者の募集については、研究代表者と研究協力者が持つネットワークを利用したり、地域の国際交流会など日本国外にルーツを持つ人たちが集う場所に依頼した結果、42 名が回答した。調査には、日常生活の中で不当な扱いをどの程度経験したことがあるかを尋ねる質問紙（Everyday Discrimination Scale；Williams et al, 1997）やウェルビーイングを測る質問紙（Mental Health Continuum-Short Form 日本語版;Karas et al, 2014）等を使用し、回答者の背景に関わる項目（年齢・性別・国籍・民族・学歴・収入・その他のアイデンティティ）についても質問した。

また、調査の最後に、インタビュー調査に協力してもらえるかを尋ねる項目を置き、協力を表明した人を対象とした。インタビュー調査では、12 名の日本国外にルーツを持つたちを対象として半構造化面接を行った。来日の経緯や 1 日の様子、日本に来てから経験した出来事の中で印象に残っているものやストレスを感じたこと、同僚や家族や地域の人たちとの関係性等について質問し、インタビューデータは全て書き起こして、主題分析を使ってテーマを抽出した。

４．研究成果

質問紙調査の結果、一部の日本国外にルーツを持つ人は頻繁に不当な扱いを経験していた。例えば、「他の人と比べて丁寧さに欠けた扱いを受ける」「他者があなたより優れているかのような行動をとる」といったことについては、８割近くの人は年数回以下の経験であったのと比較し、約 15%の人は週 1 回以上経験していた。これら日常的に不当な扱いを受ける頻度とウェルビーイ

ングの関係を検討した結果、不当な扱いを受けていると感じることが多いほど、ウェルビーイングが低くなる傾向が明らかになった。今回の質問紙調査は参加者数が少ないため、傾向があるとしか言及できないが、それでも不当な扱いを受けていると感じる頻度が高いほど、ウェルビーイングが低くなることは、先行研究でも言われてきたことであり、今後さらなる検討が必要である。また、本研究の協力者の多くは高学歴で比較的安定した経済状況におり、日本語もしくは英語が話せる人たちであった。そのため、経済的な理由で来日した人たちや日本語や英語でのコミュニケーションが困難である人たちでは異なる結果である可能性もあり、さらなる検討が必要である。

インタビュー調査の結果、＜言語やライフイベントによるストレス＞、＜支援資源の有無＞、＜安全性＞＜キャリア発達＞＜コミュニティ＞＜友人や家族との関係＞＜母国と日本との比較＞＜日本人からの差別的な言動＞＜他の外国人からの差別的な言動＞＜「外国人」であることの利益と不利益＞＜自己の定義＞などの多様なテーマが語られた。多様な語りの中でも共通してみられたことは、自己や現状が相対性の中に存在すること、支援資源が関係性の中に存在すること、そして、多くの物事や経験には表裏が存在することであった。

まず、生活の基盤が母国から日本に移り生活を成り立たせていく過程において、絶対的と捉えられるようなテーマは比較的少なくなり、相対的に物事を捉えるようになる様子が伺える。来日まで持っていた自身の価値観や物事に対する考え方がホスト国（日本）での生活により変わっていくことを受容し、さらに広い視点で自分の生活やアイデンティティを捉えていく様子が語られていた。本研究に協力してくれた参加者の多くは高等教育を受けており、比較的安定した生活基盤がある。そういった背景が、変容する環境と自身のアイデンティティに適応していきやすくしていることも考えられる。

また、支援資源が関係性の中に存在することから、日本国外にルーツを持つ人たちへの支援資源は職場やコミュニティなど当事者が関係性を築きやすい場所に届ける必要性があるといえるだろう。支援資源は、人々の心の健康を促進するために重要なものであるが、支援資源の存在が人々から見えず、存在自体を知らなければ使えないものでもある。そのため、支援資源はただ提供すれば良いのではなく、いつ・どこで・誰がその資源の存在について周知し、使えるようにするかが重要な要因となってくる。さらに、ジェンダーや性的指向、婚姻状況といった社会的属性によっても必要な資源が異なることがうかがえた。そのため、「外国人のための支援」を提供するだけでは不十分といえ、多様な背景を考慮した支援と社会基盤の構築が必要だろう。さらに、他者からの行動が心の健康に影響があるとすると、本人への支援だけでは心の健康を促進するには難しく、広く社会に対して多様性に対する認識を高め、多様な人たちが生きやすくなるような介入の仕方を検討していくことも必要である。

＜引用文献＞

Banks, K. H. & Kohn-Wood, L. P.(2002). Gender, ethnicity and depression: Intersectionality in mental health research with African American women. *Scholarship, 6*, 174-184.

Branscombe, N. R., Schmitt, M. T., & Harvey, R. D. (1999). Perceiving pervasive discrimination among African Americans: Implications for group identification and well-being. Journal of Personality and Social Psychology, 77(1), 135-149. https://doi.org/10.1037/0022-3514.77.1.135

Chou, T., Asnaani, A., & Hofmann, S. G. (2012). Perception of racial discrimination and psychopathology across three U.S. ethnic minority groups. Cultural Diversity and Ethnic Minority Psychology, 18(1), 74-81. https://doi.org/10.1037/a0025432

Crenshaw, K. (1989). Demarginalizing the intersection of race and sex: A Black feminist critique of antidiscrimination doctrine, feminist theory and antiracist politics. *University of Chicago Legal Forum, 1989*(1), 139-167.

人権教育啓発推進センター（2017）外国人住民調査報告書

Kelly, C., Kasperavicius, D., Duncan, D., Etherington, C., Giangregorio, L., Presseau, J., Sibley, K. M., & Straus, S. (2021). ‘Doing’ or ‘using’ intersectionality? Opportunities and challenges in incorporating intersectionality into knowledge translation theory and practice. *International Journal of Equity in Health, 20*:187.

Kessler, R. C., Mickelson, K. D., & Williams, D. R. (1999). The prevalence, distribution, and mental health correlates of perceived discrimination in the United States. *Journal of health and social behavior, 40(*3), 208-230.

Lamers, S. M., Westerhof, G. J., Bohlmeijer, E. T., ten Klooster, P. M., & Keyes, C. L. (2011). Evaluating the psychometric properties of the Mental Health Continuum-Short Form (MHC-SF). Journal of clinical psychology, 67(1), 99-110. https://doi.org/10.1002/jclp.20741

李 洪章（2010）朝鮮籍在日朝鮮人青年のナショナル・アイデンティティと連帯戦略　社会学評

論 61, 168-185
三木良子・白石弘巳（2011）滞日外国人の精神保健・医療・福祉の実態と課題　ライフデザイン学研究 6,129-142
Poyrazli, S. (2003). Ethnic identity and psychosocial adjustment among international students. *Psychological Reports, 92*(2), 512-514.
Smith, R. A., & Khawaja, N. G. (2011). A review of the acculturation experiences of international students. *International Journal of Intercultural Relations, 35*(6), 699-713. https://doi.org/10.1016/j.ijintrel.2011.08.004
総務省（2019）在留外国人統計
Suzuki, H., Hasan, N. T., & Rundles, K. (2017). Prevention of academic, cultural and behavioral problems among international student populations. In M. Israelashvili & J. L. Romano (Eds.), *Cambridge Handbook of International Prevention Science*. (pp. 408-431). Cambridge University Press. NY.
Williams, D.R., Yu, Y., Jackson, J.S., and Anderson, N.B. (1997). Racial differences in physical and mental health: socioeconomic status, stress, and discrimination. *Journal of Health Psychology, 2*(3):335-351.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 Williams, E.A.	４．巻 17
２．論文標題 Japanese language use, identity and community among foreign residents of Japan	５．発行年 2024年
３．雑誌名 Global-Local Studies	６．最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Williams, E.A.	４．巻 27
２．論文標題 Empathy across cultures: Analysis of a positive intercultural maternity care experience in Japan	５．発行年 2024年
３．雑誌名 異文化コミュニケーション／Journal of Intercultural Communication	６．最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Rogers Lisa、神崎 真実、Ottman Tina	４．巻 39
２．論文標題 Unconscious Biases and Attitudes of Young Japanese People Toward Visibly Different Immigrant Women in Japan	５．発行年 2022年
３．雑誌名 総合文化研究所紀要 = Bulletin of Institute for Interdisciplinary Studies of Culture Doshisha Women’s College of Liberal Arts	６．最初と最後の頁 57～69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15020/00002313	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Williams Elisabeth	４．巻 16
２．論文標題 Identity negotiation and residents with diverse-roots in Japan	５．発行年 2023年
３．雑誌名 グローバル・ローカル研究	６．最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　4件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 Rogers, L.
２．発表標題 Migrants and Refugees: Disparities and realities of people with diverse heritages in Japan
３．学会等名 2023 SIETAR Japan 38th Annual Conference
４．発表年 2023年

１．発表者名 武藤崇・鈴木華子・佐々木銀河・村井佳比子・下山真衣
２．発表標題 「多様性を尊重する」行動とは何か
３．学会等名 日本行動分析学会第41回年次大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木華子・植松晃子・大山潤爾・飯田敏晴・鈴木美枝子・竹澤智美
２．発表標題 多様性を心に留めた研究や実践を考える
３．学会等名 日本心理学会第87回大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Suzuki, H.
２．発表標題 Multicultural Issues and Training in Counseling Education in Japan
３．学会等名 Annual Conference of the Asia-Pacific Association for Teacher Education（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2023年

１．発表者名 Suzuki, H., Carrillo, S., Avci-Werning, M., & Clinton, A.
２．発表標題 Psychological Well-being in Global Context
３．学会等名 PSICOSALUD 2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Suzuki, H.
２．発表標題 How can we reduce inequalities? Applications of psychological sciences to global challenges
３．学会等名 PSICOSALUD 2022（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 Williams, E.
２．発表標題 Gender-friendly practices in language classrooms: Diversity in masculinity across communities
３．学会等名 Japan Association Language Teachers Pan SIG conference 2023
４．発表年 2023年

１．発表者名 Kim, M., Tomioka, M., Saki, M., Rogers, L.
２．発表標題 Introducing real experiences of multicultural identities and belonging
３．学会等名 SIETAR Japan 第37回大会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	Ｒｏｇｅｒｓ　Ｌｉｓａ (Rogers Lisa) (40580692)	同志社女子大学・現代社会学部・教授 (34311)	
研究分担者	ＷＩＬＬＩＡＭＳ　Ｅｌｉｓａｂｅｔｈ．Ａｎｎ (Williams Elisabeth Ann) (90897977)	神戸女子大学・文学部・講師 (34511)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Summer School on Cultural Translation of Psychology Terminologies	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関